

一八八五年十月二十九日(木)

聖ラーマクリシュナ、シャームプクルの家で信者たちと共に

医者と校長——肝心なものは何か？

今日は木曜日、アツシン黒分六日目。一八八五年十月二十九日、午前十時。タクールは病気のため、カルカッタ市内シャームプクルにずっと滞在しておられる。治療にあたっている医師、サルカル先生の家はシャンカリトラにある。いま医師は、タクール、聖ラーマクリシュナの弟子の一人と話をしている。彼はタクールの病状を報告するために、毎日午前中に医師のもとを訪れるのである。

医師「ほら、ビハリー・バドゥリ先生のひとつ話！ ゲーテの靈魂（精妙体）が肉体から出ていくのを、当のゲーテが見ていた、という話！ 不思議なことですねえ！」  
Geat's spirit

校長「大覚者様（パズ・ハンサ・デーヴ）がいつもおっしゃるように、そういう話は私どもに必要なんでしょうか？ 我々がこの世に生まれたのは、神の蓮華の御足に対する信仰を養うためです。タクールがおっしゃるには、ある人がマンゴーを食べるために庭にやって来た。ところが彼は紙と鉛筆を持ってきて、庭の木が何本あるか、枝が何本あるか、葉が何枚あるか、くわしく調べたり書きつけたりしはじめた。庭番の人

が彼に、『あなた、何をしているんですか？ 何しにここに来たのですか？』と聞くと彼は、『いま、木や枝や葉の数を調べています——実はマンゴーを食べに来たんです！』庭番は、『マンゴーを食べに来たのなら、余計なことをしないでマンゴーを食べて下さいよ。そんなものを数えていてどうするんです？』

医師「大覚者<sup>パラマハンサ</sup>は一番肝心なものをとり出すことができたのだ、と私は見えていますよ」

やがて医師は、彼の同種療法<sup>ホメオパシー</sup>の病院に関する話を長々と始めた。——どれだけの患者が毎日来るか、そのリストを見せてくれた。それから、初めのうちはサルザー先生はじめ他の開業医たちが口をきわめて自分を悪く言い、いろいろな月刊誌に反対記事を書いたりした、という話まで聞かせてくれた。

医師は校長をうながして馬車に乗った。数件の患者の家に往診に行くのである。はじめにチョルバガン、次にマータガシヤ小路、次にパトゥリヤガート。往診を全部すませてから聖ラーマクリシュナのところへ行くのだ。医師はパトリヤガートでタゴール家に寄り、そこで少し引き止められた。馬車に戻るとまた話をしはじめた。

医師「ここのご主人と大覚者<sup>パラマハンサ</sup>の話をしましたよ。テオソフィ（神智学協会）のことも、オルコット大佐の話も出しました。大覚者<sup>パラマハンサ</sup>は、ここのご主人に腹を立てていらつしやる！ なぜだか知っていますか？ ここのご主人が、『私は何でも知っている』と言ったからなんですよ」

校長「いいえ、どうして腹を立てたりなさるでしょうか。ただ、私の聞いたところによると、一度

お会いになって、大覚者様は神のことについていろいろおっしゃったそうです。その時、このご主人が、『そう、そのことはみな知っています』とおっしゃったらしい……」

医師「このご主人は、科学協会サイエンスに三万二千五百タカも寄付されたんですよ」

馬車は進み、ブラバザールの方に戻る道筋だ。医師はタクルの看病のことについて話しはじめた。

医師「あなた方、あのかたを南神村ドンキートンにお返しする気があるのですか？」

校長「ありません。そうすると我々信者たちが、大そう不便になりますから——。カルカッタにいて下されば、毎日往来ゆききでできますからね——毎日お会いできます」

医師「そうすると、ずい分費用がかかるでしょう」

校長「信者たちは、そのことは何も気にしておりません。ただ、看病ができさえすればいいと思つて、そればかりに気をつかっているのです。どこにおられても費用は同じことですから——。あちらに行かれたら、我々はとても毎日行くことができませんからね」

聖ラーマクリシュナ、サルカル先生、バドゥリ医師ほか、信者たちと共に

〔サルカル先生、バドゥリ、ドゥカリ、若いナレン、校長、シャーム・ボース〕

医師と校長はシャームブクルの二階家に到着した。この家には表側にペランダのついた部屋が二つある。一つは東西に、もう一つは南北に長い部屋だ。その初めの部屋に彼等が入っていくと、タクルはバドゥリ医師やその他大勢の信者たちにとりまかれて、ニコニコしながら坐っておられた。

サルカル先生はタクルの脈をとり、病気の様子をよく診た。それが終わると、やがて会話は例によつて神さまのことに……。

バドゥリ医師「わかりますか、すべての現象は夢のようなものなのです」

サルカル先生「すべてがデイリユージョン(幻影、夢、妄想)? それでは、いったい誰のデイリユージョンで、何故(なぜ)デイリユージョンなんですか? もしみながデイリユージョンだと知っていたら、何のためにしゃべったりするのですか?」

I cannot believe that God is real and creation is unreal. (神は真実在で、神の創造物は虚仮・夢幻、こんなことは私には信じられない)」

〔ソーハムと召使いの態度——ジュニヤトナ バクテイ 智識と信仰〕

聖ラーマクリシュナ「だからさ、こういうのが良い態度なんだよ——神は主人、私は召使い、と。身体からだがホントに実在あると感じている間は、どうしてもワタシとアンタがあるんだから、その境地では自分は神の召使いだと思っていればいいんだ。その境地で、ゞそれ《神》は我なり(ソーハム)ゞ などと言つてはいけない。

わかるかい? 片隅から眺めても、真ん中から眺めても、同じ部屋を眺めているんだよ」

バドゥリ「(サルカル医師に向かつて)——私たちの言ったことは皆、ヴェーターンタにありますよ。科学ばかりでなく、少しは経典、聖典たぐいの類を勉強なすつたら如何いかにですか」

医師(サルカル)「なぜですか? この方(タクール)は聖典を勉強してこんなに賢明になられたのですか? この方自身、そうではない、と言っておられますよ。(タクールに)——聖典を読まなければダメなんですか?」

聖ラーマクリシュナ「けれどねえ、わたしやどれほど聞いたことかねえ!」

医師「ただ聞くだけでは誤解するおそれがあります。あなたは、ただ聞いただけではない」  
また他の話も出て、会話は続いた。

〔あの人は気狂いだ——自分の足の塵をとらせること〕

聖ラーマクリシュナ(「医師に)——あなたはわたしのことを、『あの人は気狂いだ』と言ったそうだね。(校長たちを指して) だからこれたちは、あなたのところへ行きたがらないんだよ」

医師「校長の方をチラリと見て」まあ、そんなこと——。しかし、高慢だということはいましたよ。あなたは自分の足の塵を他人に平気でとらせるが、ありやどいうわけです?」

校長「そうしないと、皆が泣くんですよ」

医師「彼等は心得違いをしています。——教えてやる必要があります」

校長「どうしてでしょうか? あらゆるところにナーラーヤナが在いますでしょう?」

医師「それには異議ありませんよ。すべての人に対してそうすればいいのです」

校長「神が非常に多くあらわれている個人があるのですよ! 水はあらゆる場所に含有されています」

すが、しかし、池、川、海にすこぶる多くあらわれているでしょう。あなたは大科学者フアラデーを尊敬するのと同じだけ、なりたてホヤホヤの Bachelor of Science (理系の学士) を尊敬なさいますか?」

医師「その意見には私も賛成です。でもゴッド(God)と呼ぶのはいかがなものでしょう?」

校長「我々がお互いに挨拶するのは何故ですか? すべての人が胸の奥にナーラーヤナを宿しているからですよ。あなたはそれがよくわかっていないし、また、考えてもおられないのですよ」

聖ラーマクリシュナ(医師に)「あるものには特別によくあらわれているんだよ。これはあなたにも話したと思うが、太陽の光線は地面にも反射しているし、樹にも、鏡にも反射する。でも、鏡が他のものよりよけいに反射するよ。よく見てごらん、ブラフラーダのような信者と、ここにいる信者たちと同じかい? ブラフラーダは身も魂もすべてをあの御方に捧げていたんだよ!」

医師は沈黙していた。そこにいた一同も沈黙していた。

聖ラーマクリシュナ(医師に)「ね、あなたはこちら(自分を指す)に惹かれてる。あんな、わたしに言ったじゃないか。あなたが好きだって——」

〔聖ラーマクリシュナと世俗の人——あなたは欲張りで女好きで傲慢〕

医師「あなたは Child of Nature (自然の子)だ。それでそう言ったのです。人があなたの足に触って礼拝する——ああいうことは、あなたにとって良くないですよ。私はいつも思っているんです。こんなに善良な人を、皆がよってたかって害しているとね。ケーシャプ・センにも追従者たちがそ

う種類のことをしましたね、まあ聞いてください——」

聖ラーマクリシュナ「あなたの言うことを聞けつて？ あんたは欲張りで、大好きで、傲慢だよ！」  
バドゥリ「(サルカル先生に)——つまり、あなたは人間の特質を具えている、ということですよ。  
人間というものの一般的特質がそうなんです。金が欲しい、名誉が欲しい、女が欲しい、そして自己  
中心的——それが人間というものですよ」

医師「そういうふうにおっしゃるのでしたら、私はあなたの喉の病気を診療するだけで帰りましょ  
う。ほかのことに用はありませんから。議論をするのでしたら、私は自分で正しいと思うことを言わ  
せてもらいます」

みんな、押し黙ってしまった。

〔否定と肯定 (Involution and Evolution) —— 三種類の信仰者〕

しばらくするとタクルは、再びバドゥリ医師を相手に話をはじめられた。

聖ラーマクリシュナ「わかるかい？ この人(サルカル先生)は現在のところ、これではない、これでもない、と否定の道を進んでいるんだよ。神は人間ではない、この世界とは関係ない、創造ともか  
かわりない、というふうだね。だが、もつともつと先に進むと、こんどはすべてを肯定するようになる。

(訳註) バナナの木の外鞘をむいていくと、木髄になる。

外鞘と木髄とは全く別のものさ。外鞘は木髄じゃないし木髄は外鞘じゃない。でも最後に人は気付

くんだ——外鞘あつての木髓、木髓あつての外鞘だ、と。

(サルカル先生に) 信仰者には三種類あつてね、下信の人、中信の人、上信の人と——。

下信の人は、神ははるか遠い空の彼方において、創造物と神とは全く別のものだと言う。中信の人は、神は内なる導き手と言う。神はわが胸の奥深くに在す。——心の中に神を見るんだ。上信の人は、神は見るもの全てになつておられる。神こそ二十四の原理になつていなさるのだと見る。その人にとつては、下も上もあらゆるところが神ばかり。

あんた、ギターとバークヴァタとヴェータータを読んでごらん——そうすりゃきつと、みんなわかるから！

創造物の中に神さまは在らないかい？」

医師「いいえ、あらゆるところにいらつしやいます。だから、探すということができないのです」  
間もなく、別の話題に移つた。タクール、聖ラーマクリシュナは絶えず霊的な興奮状態になり、それが病気を進行させるのではないか、ということについて——。

医師「(タクールに)——興奮を抑えなけりやいけませんよ。私でさえとても興奮するんですからね、あなたの方よりずっとたくさん踊れるくらいですよ」

(訳註1) バナナは高く大きくなるが木ではなく草の仲間で、幹に見える部分の何層にもなっている堅い外鞘を剥いていくと中に柔らかい木髓があり、でんぶんを多く含んでいて食用にされる。

若いナレン「興奮がもつと強くなったらどうなさいますか？　ハハハハハ」

医師「Controlling Power(抑制力)も強くなるよ」

聖ラーマクリシユナと校長「そうはおっしゃいますが……」

校長「霊的興奮状態になったらどうなるか、あなた、おっしゃることができますか？」  
間もなく、ゼニカネの話になった。

聖ラーマクリシユナ「(医師に)——わたしはカネのことを全然考えたこともないよ。わかるかい？  
え？　そういうフリをしているんじゃないんだよ！」

医師「私だつて考えたことありませんよ。まして、あなたはねえ！　金庫は開けつ放しです」

聖ラーマクリシユナ「そういえば、ジャドウ・マリツクもときどきボンヤリするねえ——食事の席に坐つても、ときどきウワの空になって、いいものでも悪いものでもおかまいなしに食べるんだ。

——誰かが、『それは食べない方がいいですよ。それはよくないですよ』と注意したりすると、『アーツ、これが悪いって？　ほんとかね！　エーツ？』なんて言うんだ」

タクルルは、神を想うあまりの忘我の状態と、俗事に気をつかいすぎでの忘我の状態とは全く質が違ふということ、それとなくおっしゃつたのだらうか？

また、信者たちの方を眺めながら、医師を指してタクルルはおっしゃる——「ホラ、物がよく煮えるとやわらかくなる。この人は大そう固かったが、今は内部なかの方から少しずつやわらかくなってきた」

医師「煮えると外の方からやわらかくなるんですよ。残念ですが、私は今生ではやわらかくなくなりそ

うにありません」(一同笑う)

医師は帰りかけて、またタクールと話をしている。

医師「足の塵をとらせるあいさつを、皆さんに禁止することはできませんか？」

聖ラーマクリシユナ「みんなが、完全なるサツチダーナンダをわかると思うかい？」

医師「それならそれと、(訳註2)きちんと言う必要があるんじゃないですか？」

聖ラーマクリシユナ「それぞれ好みや傾向が違うし、それに、資格が違うよ」

医師「それは、どういうことですか？」

聖ラーマクリシユナ「好みの違いがわからないかね？ 同じ魚を食べるにしても、人によってカレー煮にしたり、フライにしたり、酢漬けにしたりして食べる。またはしつこいピラフにして食べる人もある。それに、(訳註3)各々の資格(修行の段階)が違う。(弓を教える時)最初はバナナの木を狙わせる。次がランブの芯。その後で飛ぶ鳥——」

(訳註2) 本来なら完全なるサツチダーナンダの礼拝として、その具現である聖ラーマクリシユナの足の塵をとるのであるが、ただ聖者の徳を頂こうとして足の塵をとる者もいるので、きちんとそれを言う必要を説いたと思われる。  
(訳註3) 靈性修行の段階が進み、準備が整って資格を得た人にしか受け取ることが出来ない、または先に進むことが出来ないものもあったようである。聖ラーマクリシユナの没後、ラーマクリシユナ・ミッションが作られたあと、ホーリー・マザー(サーラダー・デーヴィー)の写真を求めに信者たちが来て、スワミ・サーラダーナンダはその段階に達した者、その資格のある者にしかそれを与えなかつたさうである。

〔<sup>クアカンダ</sup>完全〕の神想——サルカル先生とハリバツラブの姿〕

夕方になった。タクールは神想到沈潜しておられる。これほどの病気なのに、すっかりそのことを忘れ去っていらつしやる。二、三人のごく親しい信者たちがそばに坐つて、タクールのお姿を凝視していた。タクールはかなり長い時間、そのままの姿勢でおられた。

タクールは平常に戻られると、すぐそばに坐つていた校長にだけそつとささやかれた。——「ね、<sup>クアカンダ</sup>完全<sup>に</sup>に心が溶け込んでいたんだよ！ そのあとで、いろんなことが見えた。医者は——あの人は大丈夫だ、少し日数<sup>ひにち</sup>がかかるけど——。今はあまりヤイヤイ言い過ぎない方がいい。それからもう一人見た。<sup>ク</sup>彼も引きよせよう<sup>ク</sup>という言葉が心に浮かんた。その人(ハリバツラブ)のことは、後でお前に話すよ」

〔世俗の人への様々な教え〕

シャーム・ボースとドウカリ医師と、あと二、三人が部屋に入つてきた。こんどはその人たちと会話がはじまる——。

シャーム・ボース「あー、先日おつしやつたあのお言葉、すばらしいですねえ」

聖ラーマクリシュナ「(ニコニコして) どんな話だつたかな？」

シャーム・ボース「あれですよ、あれ——<sup>ジュニヤナ</sup>智<sup>アジュニヤナ</sup>と無智の彼方には何があるか」

聖ラーマクリシユナ「大覚さいとく(ヴィジュニヤーナ)だよ、ハハハハハ。いろんな知識を無智アジュニヤーナという。すべての中に神がいらつしやる——これを智シニヤーナという。神と共に語り、神と身内のように親しく交わる——これを大覚さいとくというんだよ。

木に火の性がある、と知るのが智シニヤーナ。実際に火を燃やして飯を炊き、腹一杯食べて栄養をつける——これが大覚さいとくだ」

シャーム・ボース「それから、あのトゲの話！ ハッハッハッハ」

聖ラーマクリシユナ「アハハハハハ、あれか——足にトゲが刺さると、もう一つのトゲを探してくる。そしてそれで刺さったトゲを抜く。抜き終わったら二つとも捨ててしまう。それと同じように、無智のトゲを抜くために智識のトゲを用意しなげりゃならぬ。無智を抜きとった後は、無智も智識も両方とも捨てる、ということさ。そのときが大覚さいとくだ」

タクルルはシャーム・ボースのことを、とても満足に思っけいらつしやる。彼は相当な年寄りで、今はただ、静かに神を想って過すごうというのが望みだった。大覚さいとく者パラムハムサ・デーヴ様のうわさを聞いて、ここにやってきたのである。今日で二度目の訪問だ。

聖ラーマクリシユナ「(シャーム・ボースに)——世間話は一切やめておしまい。神さまの話以外はしゃべらないようにおし。俗物どもを見かけたら、そーつとその場から離れるようにおし。今までずーつと世間で暮らしてきて、みんな頼りにならぬ空しいものだということがよくわかっただろうさ！ 神さまだけがほんとにあるんで、ほかのものは皆、まぼろしだよ。神さまだけが永遠の実在で、

ほかは皆せいぜい二日ばかりのものだよ。世の中なんて何だ？ 酸っぱいアムラさ。(訳註4)食べた気がしても、あれの中に何がある？ かたい皮と種ばかりだろう？ 食べたらさっそく腹下した」

シャーム・ボース「はい、その通りです。おっしゃること一つ一つ、ほんとうのごとでございます」  
 聖ラーマクリシユナ「長い間、世間のことばかりいろいろとやってきたんだ。今になってその騒々しいところで、瞑想だの、神想だの、とても出来やしないよ。何日か独りであることが必要だ。独りにならないと心が落ち着かない。だから、家から離れたところに瞑想する場所を見つけなさいよ」  
 シャーム・ボースは何か考えるようにしてしばらく黙っていた。

聖ラーマクリシユナ「ハッハッハッハ、菌もすっかり抜けてしまったのに、今さらドウルガー供養とは何ごとだね？ (一同笑う)。ドウルガー供養をやめたしまった人が、『なぜ、ドウルガー供養をやめたんですか？』と聞かれて、『もう菌がなくなってしまったからさ』と答えた。犠牲に供えた山羊の肉を噛む力がなくなったからだよ」

シャーム・ボース「アー、いいお話ですねえ！」

聖ラーマクリシユナ「この世は砂と砂糖が混じっている。蟻みたいに砂をよけて砂糖を食べなさい。砂糖だけより分けて食べる人は賢明だ。あの御方を想うための静かな場所を用意おし。瞑想の場所を！ そうおしよ。わたしも訪ねて行くからさ」

一同、しばらく沈黙していた。

シャーム・ボース「先生、転生てんじょうというのは、ほんとにあるのでしょうか？ また生まれ更かわってこ

なければならぬものでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「神さまにお聞きよ——一生懸命に祈って。そうすればあの御方が何でも教えて下さる。ジャドウ・マリツクと話をするようになれば、ジャドウ・マリツク自身が自分からいろいろ話してくれるよ。家がどこどこに何軒あって、お金や株券がざっとどれくらいあるかなどを。会って話すようになりもしないうちからあれこれ知りたがるのは、正しいやり方じゃないね。先ず第一に神をつかむこと、そのあとで知りたいことは、あの御方がちゃんと知らせて下さる」

シャーム・ボース「先生、この世でさんざ悪いことをした人間でも、神を覚えることができるものでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「身体から離れる前に修行をしたり、それから、修行をしているうちに捨身した人や、神様を呼びながら捨身した人の場合、罪なんかがくつつく余地があるかね？ 象のことを考えてみなさい。きれいに行水した後でも、放っておくとすぐホコリや泥にまみれてしまう。しかし、象使いが体をきれいに洗ってやってからすぐ小屋に入れておけば、もう汚れることはないだろう」

タクールの難病！ それにもかかわらず、この無際限の慈悲の海である御方は、人間の悩みに同情

（訳註4）アムラ（あむら卵の木）——スモモのような果実で酸味があり、未熟なうちはチャツネ（ペーリスト状のソース）にする。熟した実は食べられるが一般的ではない。実の大きさに比べて種がとでも大きく食べる部分は少ないので、見かけだけで実のない物、あまり役に立たない物の代名詞のようになっている。

されて、何とか皆にほんとうの幸福を与えたいものと、日夜考えていらつしやるのだ。信者たちは、ただ感激するばかりであった。

シャーム・ボースを励まして下さり、畏れる必要はないことを請け合つて下さった。「神に祈り、神に呼びかけながら脱身しぬば、罪などはその人のそばに寄りつくこともできない」